

読者と選ぶ 「建築と社会」賞入賞発表

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■第10回選考委員(50音順)

井上雅人(武庫川女子大学講師)

江川直樹(関西大学教授)

鈴木克彦(京都工芸繊維大学大学院教授・

「建築と社会」編集委員)

多田元英(大阪大学大学院教授)

記事の無断転載を禁じます。

論考部門入賞

白井晟一における石の「発見」(2010年7月号)

倉方俊輔

建築における石の特集で、白井晟一について書いてください。突然、このような依頼を受けて驚きました。しかも、伝統ある「建築と社会」誌です。当時の自分にとって「建築と社会」は、第一に日本建築学会の「建築雑誌」に並ぶ歴史研究の基礎文献でした。第二に関西建築界の優れた論考が掲載される、縁遠い雑誌と思っていました。東京に生まれ育ち、日本近代建築史を研究する身にとっては。

そして、今これを書いているのは大阪です。この春から在阪の大学に着任して、研究・教育活動を始めました。原稿を執筆した時には思ってもみないことでしたが、不思議なご縁です。

この1年の間に、さまざまなことがありました。自分の話で申し訳ないのですが、2010年度に北九州小倉にある大学で教えていた時の様子は「建築と社会」2010年10月号に「研究の風景」として書かせていただきました。

東京以外への赴任は、自ら望んだことでした。しかし、頭では分かったようであっても、身を移して初めて会得できることが、理解の遅い私には多くあります。東京以外の街に、それぞれ異なった豊かな可能性を感じました。そうした街のほうが、むしろ状況は動かしやすいのではと思いました。ただ、多くの人が、東京至上主義と量的成長の考え方に今もとらわれているのは意外でした。それは明治期や戦後復興期には効率的だったでしょうが……。保護の対象ではない、互いにコミュニケーション可能な「強いローカリティー」を私は望んでいます。国内の多極化によって、日本はもっと面白く生きられるのではないのでしょうか。

賞をいただいた論考では、白井晟一の戦後を論じました。日本の戦後を振り返ること、東京以外の豊かさを見つめること。今年、その必要を感じているのは、私だけではないと思います。

倉方俊輔 くらかた・しゅんすけ

1999年 早稲田大学大学院理工学研究科博士課程満期退学

2010年 西日本工業大学准教授

2011年 大阪市立大学大学院工学研究科准教授

●著書

『吉阪隆正とル・コルビュジエ』(王国社)

『建築家の読書術』(TOTO出版、共著)

『東京建築ガイドマップ』(エクスナレッジ、共著)

『伊東忠太を知っていますか』(王国社、共著)ほか



論考部門入賞

京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に—(2010年10月号)

中村昌生

戦後、「現代数寄屋」などと呼ばれ、新しい和風のデザインが目ざましく流行した。そこには、日本建築の伝統が近代化されていると評価されていた。確かに目新しい魅力が感じられた。しかしそこに日本建築の真髄が生かされているとは、私には思えなかった。それは、私が茶室の研究に取り組むことになった理由の一つともなった。

茶室の研究では、工匠とは異なる茶匠の創作の秘密を探りたかった。そのために、自身も物づくりを志し、幸い仕事に恵まれ、実践的研究を進めることができた。そこで茶匠の建築法とともに、大工や左官の技術も学べた。茶匠の建築法は近代の数寄者たちによって、和風の基調として生かされ、普請の黄金時代を築きあげた。「近代和風」の世界である。

「夏は涼しく、冬は暖かに」をもてなしの極意とした茶の湯は、日本人が昔から続けてきた「自然との共生」に培われた英知の源泉である。茶匠の建築もその英知に根ざしたもので、その建築はおのずから、自然との対立を^{かわ}躲し、融合を求める。そして「庭屋一如」の空間が具現できたのである。

今回の天災は、自然との共生の思想を忘れ、自然をもコントロールできるような錯覚に陥りかけた、すべての日本人に猛省を促した。「便利で快適な生活」の追求だけでは得られない理想の世界を、「現代和風」は私たちに啓示してくれる。

自然とともに呼吸する家づくりを甦らさなければ、自然の怒りはいつまでも鎮まらないであろう。



中村昌生 なかむら・まさお

1927年生まれ。現在京都工芸繊維大学名誉教授、福井工業大学名誉教授。

年来、茶室・数寄屋の研究を通じ、日本建築の伝統を追究。1980年伝統建築技術の継承と発展のため、同志と^あ京都伝統建築技術協会を設立。1991年より理事長。

日本芸術院賞、第1回圓山文化賞など受賞。1998年京都市文化功労者。

著書に『茶匠と建築』『数寄屋邸宅集成』他多数。

佐野記念病院/介護老人保健施設 栄公苑

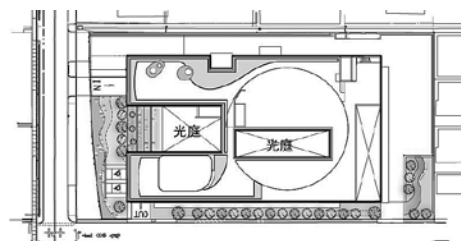
(2010年6月号)

京都工芸繊維大学大学院教授

鈴木克彦



バルコニーのないシンプルな矩形に、ランダムに穿った窓。「一見病院や老健施設に見えず、どこことなく愛らしさを感じる建物」をデザインテーマとした。建物には2つの開放的な光庭を設けている。共用部では、光庭を介して視線が抜け、空間の広がりを感じることができる。光と風、緑が豊かで潤いのある療養環境が得られることを目指した。地面から屋上へ、光庭から空へと段々に緑を連ね、内と外を緩やかにつなげる。そして街並みにも潤いを。建物を使う方、訪れる方に「何だかちょっといい感じ」と思っていたら嬉しい。



所在地 大阪府泉佐野市中町2-4-28
 建築主 社会医療法人 栄公会
 施工 安藤建設・ダイダン・三晃空調



岡田泰典 おかだ・よしのり▶

1992年 日建設計入社

現在 日建設計設計部 主管

●過去の作品

村田製作所本社

京都リサーチパーク8号館

INAX大阪ビル

京都リサーチパーク9号館 など



◀西田佳代 にしだ・かよ

1993年 日建設計入社

現在 日建設計クライアント

リレーション部 課長

●過去の作品

住友病院

読売京都ビル

まりデイサービス内海

阿波銀行鴨島支店 など

第10回を迎えることになった読者と選ぶ「建築と社会」賞は、本誌2010年1月号から12月号に掲載された建築作品および論考・記事を選考対象として作業が進められた。会員の声を反映し広く開かれた賞という趣旨から、読者の投票結果をふまえた後、編集委員会から建築作品13点、論考・記事16点が選考委員会に推薦された。さっそく、3月15日に選考委員会が開催され、選考委員から新たに推薦があった建築作品1点、論考2点を加えて、個々に慎重な審議を行った。審議にあたっては、「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性と環境への配慮に対する評価を重点に置いて選考したが、選考委員全員が授賞にふさわしいと評価に至った建築作品と論考を、次のとおり選出した。

まず、作品部門であるが、賞にふさわしいと全員の選考委員に評価された作品は「佐野記念病院/介護老人保健施設 栄公苑」(設計・監理: 日建設計)のみであった。光庭を巧みに組み入れた設計の技が、内外空間が一体となった明るく開放的な療養環境を生み出しており、患者の立場に立ったきめ細やかな設計姿勢が高く評価された。利用者への高い配慮という点では「春日育成苑」(設計・監理: 安井建築設計事務所)も好感が持てたが、残念ながら全員の評価が一致しなかった。「ふつうの暮らし」ができる環境に対して、入所者による評価がどのようなものであったか期待したいところである。

一方、論考部門では和風建築の魅力について論じた「京都の近代和風建築の魅力—対龍山荘を中心に—」(中村昌生氏)が高く評価された。その深みのある内容は、先生の多年にわたる茶室・数寄屋建築研究の蓄積のたまものであり、和風建築の奥深さを感じさせてくれる迫力ある内容に、全選考委員が深い感銘を受けた。論考ではないため評価対象にはならなかった「伝統木造構法を未来につなぐ」(木下孝一氏)ともども、伝統技術を次世代につなぐ責務を読者に伝えている貴重な論考である。

白井晟一の建築思想について論じた「白井晟一における石の「発見」」(倉方俊輔氏)も、建築造形における素材へのこだわりを巧みに説いた論考であり、建築技術の真髄とは何かを解きほぐしてくれる内容であった。

「建築と社会」賞の選考作業を通じ、毎号企画されている特集内容の充実ぶりには毎回感心させられている。このたびの受賞の皆様には心から感謝を申し上げるとともに、日頃から誌面の充実に鋭意取り組まれている編集委員会委員の皆様にも厚く敬意を表したい。

選考委員講評

武庫川女子大学講師

井上雅人

建築に対しては、ますます複雑な機能が要求され、建築家に対しては、ますます複雑な知識が要求されている。

今回受賞した作品の「佐野記念病院」は「介護老人保健施設 栄公苑」を併設している。高齢化社会が深化していくにつれ、リハビリテーションや介護を必要とするのが「病人」とは限らなくなり、「健常」の状態が曖昧になっている。現在、病院はいずれ回復する症状を持った「病人」がいくところではなくなりつつある。そういった状況に対応していくためには、病院にリハビリテーションや介護を行う機能を単純に付加していくという方法論では、どうしても限界があるのは明らかであろう。「佐野記念病院」以外の多くの作品でも、福祉施設をどのように複合的な機能を持った日常空間として設計していくかが試みられていたが、光のあり方によって居心地の良い空間をつくり出そうとした本作品は、その中でも評価されるべきだろう。

受賞した二つの論考、「白井晟一における石の「発見」と「京都の近代和風建築の魅力―対龍山荘を中心に―」は、どちらも歴史について書かれているが、単なる歴史研究ではなく、現在の建築にどのようにして歴史的な知恵を生かすことができるかという視点を忘れていない。

白井晟一は近年再評価が著しい建築家で、現在も展覧会が開かれている。「白井晟一における石の「発見」」においては、白井の石の使い方に着目し、白井が石を素材として「発見」するところに、日本のモダニズムの重層性を見いだしている。白井の構築的ではない石の使い方や、歴史観が現在に持つ意味は大きい。

他方、明治から昭和にかけて建てられた和風建築にこそ日本の伝統があるとするのが、「京都の近代和風建築の魅力―対龍山荘を中心に―」である。近代和風はどこかキッチュな存在として、研究の対象とはなっても、新しい建築において、まともに参照されることは少なかった。しかし、近代和風建築の木構造と、「庭屋一如」の思想が次代に受け継がれていくことの重要性を著者は力説する。先頃建てられた「京都迎賓館」を機に現代建築と伝統が融合されることを願っているが、それは単なる願望ではなく、建築家たちへの強い要望であろう。

「減築」という言葉が使われるようになっていくが、建築家の仕事は無から新しい空間をつくることではなく、既存の空間を治すことへと変わりつつあるのかもしれない、と思わせる作品や論考が多かった。先頃の震災で建築がどう変わるのか見守っていききたい。

選考委員講評

関西大学教授

江川直樹

建築作品は、読者、編集委員会からの推薦があったものは極力現地に行って確認をするように努めたが、いずれも私が建築にとって一番重要と思っているところが、そのように扱われていないのが残念であった。事前審査でも多くの票を集め、最終受賞となった「佐野記念病院／介護老人保健施設 栄公苑」も同様であった。たしかに、内部空間はよく出来ていて、東側が全面ガラスのロビーも大変気持ちよく、この規模の施設の質が向上することは社会的に重要なことである。しかし、利用者にとってだけ気持ちが良いのでは困る。幅員の大きな前面道路に面した外壁であるような分節とセットバックをしているが、本来ならば、周辺の戸建て住宅に面する側面や北背面にこそ配慮すべきである。写真が掲載されていない北背面はあまりにも貧しい。西面1階のサービス部分も雑な感じだし、開口が揃っていないことに起因するのか、コンクリートの精度も悪く、クラック防止目地も気持ち良くない。とにかく全部真っ白に塗っちゃったという感じが、このあたりはもう少しキメの細かい対応ができないものか。そのところが大いに残念であった。

その他、受賞には至らなかったが、「春日育成苑」の発想は悪くない。ここでも、プロパン庫に代表される細かな部分への処理に賛同できず、配置ももっと自由で良かったのではと感じた。

事前には票がなかったようだが、「金山センタープレイス」は思っていたように、夜の雑然とした金山の界隈性を映し出す表現で、朝は写真以上に静謐な感じでまちなみを形成している。しかしここでも、街に直に接する1階部分、特にコーナー部分の足元の処理があまりに貧しい。建築は大地と連続する部分にその本質が表れる。せっかくこれだけの発想があるのに残念である。

「白井晟一における石の「発見」」は、「「ある」ことの衝撃へと誘う沈黙の石、そこに変わらずに流れているのは、彼が抱いた直接性への希求」「素材の始原」「石そのものの発見」と述べ、建築に宿る命の大切さを感じさせる文章で、興味深く読んだ。

「京都の近代和風建築の魅力―対龍山荘を中心に―」も、あらためて建築の在り様を考えることを助ける文章である。建築が周囲と和し、威圧することのない造形でなければいけないこと、工夫をあらわに見せず、ましてや建築を立派に見せてはいけなく、そのために技を凝らすこと。近代和風を例にとって語る建築の在り様は、わが国に建つすべての建築についての真実だと感じる。

選考委員講評

大阪大学大学院教授

多田元英

「建築と社会」賞の選考委員会では、数時間に及ぶ合議のうえ以下の3点を選定した。論考の2点については、対象建築物の写真や図面が誌面に十分に掲載されておらず、構造分野の自分には一読で理解しづらいものであった。個人的には別途に資料を検索しながらの選定となった。

京都の近代和風建築の魅力―対龍山荘を中心に― 日本の建築界の近代化は、西洋建築をいかに導入してきたかで語られることが多い。それに対し、ややもすれば軽視されがちな近代木造建築に焦点を当て、明治・大正・昭和戦前における大工技術の継承および洗練熟成の事例を紹介している。京都の鹿ヶ谷から南禅寺・岡崎にかけての山荘群の建物と庭について、施主・大工・庭師の人間的な交わりを紹介しながら各山荘の魅力を論じている。近代和風建築の魅力が伝わってくる論考である。

白井晟一における石の「発見」 白井晟一の代表的な建築（計画）である親和銀行本店・松井田町役場・原爆堂計画を採り上げ、白井が石素材で何を表現しようとしたかについて論じている。構造体として石を積み上げるのではなく、鉄筋コンクリート構造の表面仕上げとしての石の使用に対して、「構造体としての使命や、様式統一への奉仕から解放されることで、私たちが古代や中世の建築から感じる石の存在感を受け継ぎ、より強調している」と論じている。機能を伴わない装飾に対して、その深い意味を読み取った事例が他にも多いが、その新たな事例として興味深く読ませていただいた。

佐野記念病院／介護老人保健施設 栄公苑 ベッド数95の病院（主として整形外科と脳神経外科）とベッド数55の介護老人保健施設が複合した鉄筋コンクリート造4階建ての建物である。凹凸のない平らな壁面に窓をランダムに配置しており、「ベッドまわりのカーテンを閉めても、通路部分に換気と採光を確保できる」などの配慮をしている。患者や入居者の居住性に配慮した施設である。